



アール・ブリュットって…

アール・ブリュットとは、「加工されていない生(き)のままの芸術」という意味のフランス語です。画家のジャン・デュビュッフェが1945年に考案した言葉で、それまでの美術や教育の流れからはみ出し、美術的なスタイルからは何の影響も受けていない、全く個人的かつ独創的な方法で作られた絵画や造形のことをいいます。ジャン・デュビュッフェは「これこそが人がつくる本当の意味での芸術だ」と価値付け、以来欧米では多くの作品が見いだされ収蔵されてきました。

日本にも、アール・ブリュットと言える作品は、ずっと以前から存在していました。皆さんご存知の山下清などは、1938年に美術雑誌で取り上げられたこともありましたが、それは「障害児美術教育の方法」としての実践例の紹介に留まっていた。つまり、アール・ブリュットの視点をもった価値観は、未だ誕生していなかったのです。

アール・ブリュットは日本でも近年注目されるようになり、現在では全国各地で作品が発見され、多くの展覧会も開かれるようになってきています。

変化の激しい今の時代の中で、人々がアール・ブリュットに心を寄せるのはなぜでしょう？それはきっと、「私の中にしかない私だけの世界」が持つ、揺るがない強さです。

その作者たちは、知的障害や精神障害のある人であったり、無名の老人であったりします。彼らは声高でなく、ささやかな方法でありながら、揺るがない自分を表現し続けています。誰かに見せる目的でつくったわけではないにもかかわらず、多くの人々の心を揺り動かしてゆくのです。

この冊子で、アール・ブリュットの魅力とゆっくり出会ってください。本当は私たち誰もの中にある表現の喜びが、深く揺さぶられるかもしれません。

01ページ(上から順に)
小幡 正雄「無題(結婚式)」制作年不詳
齋藤 裕一「ドラえもん」2003-06年
佐々木 早苗「無題」2007-08年
松本 寛庸「路」2008年

02ページ
左)八重樫 道代「ワープロ」2002年
右上)岩崎 司「無題」制作年不詳
右下)畑中 垂未「二灯の裸電球」2003年

